追放された最強令嬢は、新たな人生を自由に生きる

2

Tohno
灯乃

ill. 深破 鳴

登場人物紹介
ウィルフレッド
アレクシアの
たったひとりの従者。
クールかつ優秀だが、
主のやらかしに翻弄されがち。
ジョッシュ
明るく素直な性格の
アレクシアのクラスメイト。
ツッコミ気質。
ローレンス
ランヒルド王国の王太子。
お人好しで、ちょっと
思い込みが激しい。
???
辺境伯領に現れた侵略者。
空中戦を得意とするが、
それには秘密が
あるようで……?
アレクシア
辺境伯家を追放された
本作の主人公。
賢くて腕が立つ最強の
お嬢さまだけれど、
平民としてはまだまだ勉強中。
キャスリーン
アレクシアのクラスメイト。
商会の娘で、姉御肌。
ブリュンヒルデ
アレクシアの母。
才知に長けた
マイペースな美女。
フェルディナント
エッカルト王国の英雄。
懐が深く、大らか。

第一章　『幻想の世界(ファンタジー・ワールド)』

ランヒルド王国王立シンフィールド学園。

そこは、将来の王宮警護を担う人材を育成する、全寮制の教育機関だ。

ウィルフレッド・オブライエンが、主であるアレクシア・スウィングラーとともにこの学園に入学してから、早一ヶ月。

シンフィールド学園に入学してくるのは、平民階級の子どもがほとんどだ。

スウィングラー辺境伯家の後継者として厳しい教育を受けてきたアレクシアが、彼らの中に問題なく馴染めるものなのか――入学当初、ウィルフレッドは少なからず不安を感じていた。

だが、ありがたいことにウィルフレッドたちは、気のいい担任教師とクラスメートに恵まれている。おかげで、アレクシアは彼女自身が思っていた以上に、学園生活を楽しむことができているようだ。

何しろ、スウィングラー辺境伯家は東の国境守護を務める、武門の名家。

その後継者として生を受けた彼女は、幼い頃から最高の淑女教育と兵士教育を施されてきた。

どちらか一方だけでも、幼い子どもにとってはときに耐えがたい苦行であっただろうに、アレクシアは両方をほぼ完璧にクリアしてきたのだ。

結果、アレクシアは社交界においては誰もが讃える小さなレディとして、戦場においては有能な指揮官としての顔を持つに至った。
しかし、数ヶ月前の冬の日に、そんな彼女の日常は一変する。
従者であるウィルフレッドとともに、アレクシアはスウィングラー辺境伯家を追放されてしまったのだ。
ふたりは素性を隠して暮らしていくことを決め、同じ『ガーディナー』という家名を持つ平民の孤児として、シンフィールド学園に在籍している。
あまりに急激な環境の変化が、まだ十五歳の少女にとってストレスとならないわけがない。
そのためウィルフレッドは、常日頃から彼女の従者として、気を配っているのだが――。

風に初夏の香りが混ざりはじめた、ある日の朝。
「ウィル。次の休息日には、『幻想の世界』へ行ってみないか？」
「…………アレクシアさま。何か、おかしなものでも召し上がったのですか？」
食堂での朝食の席で、突然不思議なことを言い出した主に、ウィルフレッドは困惑して首を傾げた。
アレクシアのプレートに載っているのは、とろとろのスクランブルエッグが添えられたベーコンにサラダ、きのこのクリームスープにこんがりと焼けたパン。そして、ミルクたっぷりのカフェオレだ。

食欲が落ちておらず、何よりだと思う。いつになくにこにこと楽しげな様子のアレクシアは、とても可愛い。
（うん。今日のアレクシアさまも、いつもどおり世界一可愛いが……。言動の愉快さが、いつもどおりじゃなさすぎるな？）
スウィングラー辺境伯家にいた頃のアレクシアは、滅多に笑顔を見せない少女だった。彼女が笑うのは、社交の場において完璧な淑女のほほえみを浮かべる必要があったときだけだ。
いつ他国からの侵略者が襲撃してくるかわからない日常の中で、アレクシアが笑っているところを、ウィルフレッドは見たことがない。
だが、シンフィールド学園に入学してからというもの、ほんの少しずつではあるけれど、アレクシアの表情は年相応の少女らしくなってきている。
あまり笑うことのなかった彼女が、雑談中にこうしてわくわくと楽しげな表情を浮かべているのだ。かつての姿を知るウィルフレッドにとっては、ご褒美のようなものである。
しかし、その崇高なる事実も、敬愛すべき主が突然『幻想の世界へ行ってみよう！』などと素っ頓狂なことを口にしている現実の前では、困惑に彩られてしまう。
訝しむウィルフレッドに対し、アレクシアはパンをちぎりながらあっさりと応じる。
「いいや？　特におかしなものを食べた記憶はないぞ」
「さようでございますか……」
考えてみれば、アレクシアは自身とウィルフレッドが口にするものについて、必ず魔術による安

全確認をしている。
そして、ほぼ毎日彼女と食卓をともにしているウィルフレッドの体調には、なんの異変もない。
ということは、アレクシアの愉快な言動は食べ物のせいではなさそうだ。
ではなぜ、アレクシアはこんなことを言い出したのだろう。
不思議に思っていると、ふたりのクラスメートが近づいてきた。
「おーっす、おふたりさん」
「おはよう！　アレクシア、ウィルフレッド」
赤い髪の少年、ジョッシュ・ハリントンと、金茶色の髪の少女、キャスリーン・ヒースコート。
このふたりは、アレクシアとウィルフレッドの素性——すなわち、スウィングラー辺境伯家を追放された元後継者とその従者だということを知る、数少ない人物である。
人懐っこく大らかなジョッシュと、姉御肌でさっぱりとした性格のキャスリーンとは、入学当初から何かと行動をともにすることが多かった。
ジョッシュとキャスリーンは、ジョッシュの兄であるヒューバートとの出会いをきっかけに、ウィルフレッドたちの事情を知ることになった。人並み外れた記憶力の持ち主であるヒューバートが、アレクシアの母親譲りの美貌から、その素性に気づいてしまったのである。
事情を知ったヒューバートは、彼自身とジョッシュ、キャスリーンに『ふたりの素性を他者に伝えない』という〈誓約〉の魔術を行使した。
彼らはそうすることで、アレクシアに学園に残る選択肢を与えてくれたのだ。

まだほんの一ヶ月ほどの付き合いだが、ジョッシュたちとはいい関係を築けていると思う。
朗らかな朝の挨拶とともに、隣のテーブルについたふたりを見て、アレクシアがにこりとほほえむ。
「おはよう、ジョッシュ。キャスリーン。ちょうどよかった。次の休息日に、ウィルと『幻想の世界』へ行こうと思っているんだが、きみたちも一緒にどうだ？」
アレクシアの誘いに、ジョッシュたちは一瞬驚いた顔をした。
しかし、すぐに笑って応じる。
「おー！　なんか最近、リニューアルしたって話題になってたもんな！　行く行く！」
「あたしも！　新しいアトラクションもいっぱいできたっていうし、行ってみたいと思ってたんだよねー！」
楽しげなふたりは、ウィルフレッドのように困惑する様子がない。
……ひょっとして『幻想の世界』というのは、王都にある遊興施設か何かの名称なのだろうか。
ひとつ咳払いをしたウィルフレッドは、片手を挙げてアレクシアに問うた。
「アレクシアさま。その『幻想の世界』というものは、どこでお知りになったのですか？」
「うむ。この間、王立図書館へ行っただろう？　そのとき乗った魔導列車の中吊り広告に、『幻想の世界』の宣伝が出ていたんだが——」
アレクシアによれば、なんでも『幻想の世界』というのは、この大陸でも有数の巨大遊興施設であるらしい。

空想上の生物を模した大小さまざまな魔導具が敷地内を闊歩しており、スリルを楽しむアトラクションや華やかなパレードなど、幼い子どもだけでなく大人も楽しめる施設になっているという。
そういったものが存在していることは、ウィルフレッドも知識としては知っていた。だが、特に興味をそそられることもなかったため、その中吊り広告についてもまったく覚えがない。
（新型の魔導武器の広告だったら、間違いなく記憶していたと思うんだが……。アレクシアさまが、そういった遊興施設に興味がおありだとは知らなかったな）
ウィルフレッドが意外に思っていることが伝わったのか、アレクシアは笑って言った。
「わたしも王都に出てくるまでは、そんな遊興施設があることは知らなかったのだがな。ただ、次の休息日はおまえの誕生日だろう？」
「え？　……ああ、そう言えばそうでしたね」
虚を突かれ、反応が少し遅れてしまう。アレクシアに指摘されるまで、ウィルフレッドは自分が生まれた日のことなど、きれいさっぱり忘れていた。
ほんの幼い頃は――まだ『家族』と呼べる人々がいた頃は、毎年その日が来るのを心待ちにしていたように思う。
だが、そんな記憶はすでに遠く曖昧だ。
――ウィルフレッドの故郷は、東の海に面した大国ブラジェナである。
ブラジェナ王家を守る武門一族に生まれたウィルフレッドは、十歳のときにこのランヒルド王国へやってきた。

彼の王家が、自らの暗部を知る一族を敵とみなし、長の血族を皆殺しにしようとしたからである。ウィルフレッドの家族は、幼い末子の彼だけでも、王家の手が届かない異国で生き延びさせようとしたのだろう。彼の母は、スウィングラー辺境伯領の孤児院に息子を預けると、自らは家族の元へ帰っていった。
それ以来、ウィルフレッドは誰かに誕生日を祝われたことはない。
アレクシアの従者となってからは、給金三ヶ月分の祝い金と、半日の休暇を与えられる日でしかなかった。
そんなことを思い出していると、彼の主は軽く眉根を寄せた。
「最初は、新しい魔導武器でも買ってやろうかと思ったんだ。しかし、王都で市販されている魔導武器は、残念ながらどれも性能がいまいちでな」
「それは……仕方がないですね。学生の身で購入できるものとなると、護身用の品がせいぜいでしょうから」
現在、ウィルフレッドが所有している魔導武器は、どれもスウィングラー辺境伯家で与えられたワンオフの特注品だ。ウィルフレッドの能力を誰よりも知っているアレクシアが、魔導武器の工房に自ら注文したものだと聞いている。
（スウィングラー辺境伯家にいた頃は、アレクシアさまの護衛任務に必要なものだったし、当たり前のように受け取っていたが……。よく考えてみなくても、たぶんものすごい高級品だよな）
いったいいくらしたのだろう、と今さらながら冷や汗をかいていると、アレクシアがジョッシュ

とキャスリーンに視線を向けた。

「ジョッシュ、キャスリーン。平民の子どもたちは、何か祝い事があると『幻想の世界』のような遊興施設へ行くというのは、間違いないか？」

幸せそうに熱々のソーセージにかぶりついていたジョッシュが、まばたきをして頷く。

「おう。おれも、ガキの頃はよく親に連れてってもらってたぞ」

キャスリーンも、スープカップを手に取って笑って言う。

「うちも、家族揃って行ってたよ！　レストランで子ども用のランチを注文するとき、『誕生日だ』って伝えると、特別なデザートプレートを付けてくれるのが嬉しくてさ」

「そうそう！　おれ、食べるのがもったいなくて、こっそりポケットに入れて持って帰ろうとしたんだよなー。……速攻で母親に見つかって、『洗濯が大変になるから、今すぐ食え』って真顔で言われたけど」

楽しげに言い合うふたりの様子に、アレクシアはうむ、と頷いた。

そして、ウィルフレッドに視線を戻す。

「ウィル。我々は、せっかく平民の子どもとして過ごせるようになったんだ。ならば、誕生日の祝い方も、彼らの流儀に倣うべきなのではないかと思ってな。……ああ、いや」

何かに気づいたように、アレクシアが慌てた口調で続ける。

「もちろん、おまえの気が乗らないというのであれば、何かほかのものを考えるが――どうする？」

「ありがとうございます、アレクシアさま。とても嬉しいです。『幻想の世界』、ぜひ行かせてください」

ウィルフレッドは、即答した。

正直なところを言うなら、やはり遊興施設にはさほど興味を引かれない。

だが、アレクシアがウィルフレッドの誕生日を祝うために提案してくれた、という点が大事なのだ。

何より、彼女がわくわくと楽しそうにしている様子を見られた時点で、すでに豪華な誕生日プレゼントをもらってしまったような気分である。

アレクシアが、ほっとした様子で「そうか」と返す。

「では、決まりだな。――ジョッシュ、キャスリーン。我々は今まで遊興施設へ遊びに行った経験がないんだ。何か前もって準備しておくべきことや、注意点などがあったら教えてほしい」

彼女の言葉に、ジョッシュとキャスリーンが顔を見合わせる。

そして、ジョッシュは軽く首を傾げた。

「いや……特に必要ねえと思うけど。ちっこいガキんちょでも安全に遊べる場所ってのが、ああいうところのウリだしなー」

「しいて言うなら、服装かなあ。『幻想の世界』のアトラクションは、結構体を動かすものがあったはずだし……あ！　それなら間違いがないように、あんたたちが当日着ていく服は、あたしがセレクトしてあげるよ！」

キャスリーンが妙に気合いの入った様子で言うと、アレクシアは生真面目に首肯した。

「それはありがたいな。きみのファッションセンスは信用している。この機会に、ぜひいろいろと学ばせてくれ」
　ふたりの会話を聞いていたジョッシュが、苦笑いを浮かべる。
「そんな堅苦しく考えなくたって、大丈夫だって。……って、あれ？　ウィルフレッドって、おれらと同い年なんだっけ？」
「いいや。オレは、きみたちより一歳年長だよ」
　シンフィールド学園への入学資格は、十二歳から十八歳までの魔力を持つ子どもたちに与えられている。アレクシアやジョッシュ、キャスリーンのように、クラスメートは十五歳で入学する者がほとんどだが、それより年少の者も年長の者も数名いた。
　そっかあ、と相槌を打ったジョッシュが、ふと真剣な顔をしてウィルフレッドを見上げた。
「なあ、ウィルフレッド。おまえ、何食ってたらそんなにデカくなったんだ？」
　ウィルフレッドの身長は、すでに成人男性の平均を優に超えている。対するジョッシュは、十五歳の少年としては平均程度というところだ。
　彼の手足の大きさからして、きっとこれからどんどん大きくなるのだろう。しかし、もしかしたらジョッシュは、身長にコンプレックスがあるのかもしれない。
（うん。ここは、できるだけ慎重に答えるべき場面だな）
　そう判断したウィルフレッドは、にこりと笑って口を開いた。
「アレクシアさまの生家で出ていた食事は、ここのものとあまり変わらないと思うよ。きみはこれから成長期なんだし、きちんと食事をしてこの学園の訓練を受けていれば、すぐに大きくなるんじゃないかな」
「へえ……そっか。うん。そっか、そっか、そっか」
　希望的観測が含まれたウィルフレッドの答えは、どうやらジョッシュのお気に召したようだ。
　よしよし、と胸を撫で下ろしていると、アレクシアが気の毒そうにジョッシュを見た。
「思春期の少年が成長途中の自分の背丈を気にするというのは、よく聞く話だが……。きみは頭も容姿も性格もいいし、機転も利く。体力も、同年代の子どもの中ではかなりあるほうだろう。何より、きみの骨格からして、近い将来相当立派な体格になるのは、ほぼ間違いあるまい。そんなきみでさえ、少年らしい懊悩と無縁ではいられないのだな。難儀なことだ」
　束の間、沈黙が落ちた。
　アレクシアの言葉を咀嚼していたジョッシュの顔が、じわじわと赤くなり――。
「～～っ！　アレクシアー！　いきなり褒め殺しにするの、マジでやめてくんない⁉　恥ずかし死ぬわ！」
　最終的に、首まで真っ赤になったジョッシュは、声をひっくり返してわめいた。
　同時に、肩をぷるぷると震わせて俯いていたキャスリーンが、耐えきれなくなったように噴き出す。
「……ぶはっ！　ねえ、ジョッシュ！　入学してすぐに、アレクシアにいろいろ言われたあたしの気持ち、少しはわかった⁉　ねえ、わかった⁉」

うひゃひゃひゃひゃ、とキャスリーンは素っ頓狂な笑い声を立てた。
入学初日に、アレクシアは初対面の彼女に対し、『麗しいお嬢さん』、『たいそうな美少女』といった言葉を向けている。キャスリーンが言っているのは、そのときのことだろう。
アレクシアが戸惑った表情でこちらを見上げてくる。可愛い。
「なあ、ウィル。単なる事実を告げただけで、なぜジョッシュはこんなに恥ずかしがっているんだ？」
「仕方がありませんよ、アレクシアさま。これが、お年頃の少年というものです」
ウィルフレッドの言葉に、アレクシアはなるほど、と頷いた。
そして、真顔になってジョッシュに言う。
「ジョッシュ。たとえどれほど将来有望な人材であろうと、日々の地道な努力を怠れば、ただの無能に成り下がる。思春期の少年が、過大な自己評価による恥ずかしい勘違いのあげくに暴走、ないしは堕落していくというのも、またよくある話だ。くれぐれも、そういった無様を晒すことのないように気をつけたまえ」
「………ウッス」
ものすごく複雑な表情を浮かべ、ジョッシュがぎこちなく応じる。
「うむ。まあ、万が一きみがそういった恥ずかしい状態になった場合には、わたしがその時点でのきみに対する客観的な評価を、懇切丁寧に言い聞かせてやろう。故郷では、そういった若い兵士を諭すのは、わたしの役目だったからな。何、よほど拗らせていない限り、小一時間もあれば正気に

戻してみせるから、安心したまえ」
淡々と告げるアレクシアを、ジョッシュは真顔で凝視する。そして、ウィルフレッドにおそるおそる視線を移した。
「ウィルフレッド……？」
そっと彼から目をそらし、ウィルフレッドは答えた。
「まあ……うん。アレクシアさまの言葉責め――もとい、教育的指導はとても効果的だからね。もしオレがされていたら、恥ずかしさのあまり五分で心が折れていたかな……」
「何それ怖い」
ジョッシュがおののく。
だが、自分にとって無価値な人間に対して、アレクシアが時間を割くことはない。彼女が教育的指導をしていたのは、正面からまっすぐに向き合えば、きちんと相手の話を聞ける者たちばかりだ。
実際、彼女が故郷で鼻っ柱を叩き折った若手の兵士たちはみな、それ以来落ち着きを取り戻し、真面目に日々の修練に取り組むようになっている。
ウィルフレッド自身は、そういった勘違い野郎が公開処刑されている姿を見るたび、『絶対にああはなるまい』と身を引き締めていた。別に、彼らに感謝はしていない。ただちょっとだけ、心からの憐憫の情を抱いているだけである。
何はともあれ、次の休息日は『幻想の世界』という遊興施設へ行くことが決まったわけだ。目的地がどういった場所にせよ、避難経路だけは確保しておかねばなるまい。

どうやら『幻想の世界』というのは、それなりに有名な場所であるようだ。所在地と内部の大まかな地図くらいは、簡単に手に入るだろう。
アレクシアがシンフィールド学園での生活の継続を望んでいる以上、そう簡単に拠点を放棄するつもりはない。だが、もし彼女の身に危険が及ぶ可能性があるならば、いつでもここを出ていく覚悟はしている。
優先順位を間違えた状態で主を守り切れるほど、ウィルフレッドは強くない。
何しろ、次の誕生日を迎えたところで、ウィルフレッドはたった十七歳——いまだ未成年の若造なのだ。
（せめて十八歳の成人年齢を迎えられれば、もう少しアレクシアさまをお守りしやすくなるんだがな……）
本当に、早く大人になりたい。
心からそう願うウィルフレッドは、クラスメートたちと『幻想の世界』について楽しげに語り合う主を見ながら、そっとため息をついた。

◇❖◇

アレクシア・スウィングラーにとって、ウィルフレッド・オブライエンは唯一無二の存在である。
十歳のときに彼女と出会ってから、スウィングラー辺境伯家を追放されたあの日まで、彼女は己の

すべてをかけてウィルフレッドを育ててきた。
知識と教養、貴族社会で通じるマナー。
そして、過酷な戦場でも生き残れるだけの戦闘技術。
アレクシアの従者として孤児院から迎えられたばかりのウィルフレッドにとって、それらを身につける過程は、とても辛く苦しいものであったはずだ。だが彼は、一度たりとも弱音を吐くことなく、アレクシアが選んだ教師たちも驚くほどの速さで成長していった。
骨と皮だけのような体もどんどん大きく立派になり、いつの間にか彼女が知る誰よりも強く頼れる兵士になっていたのだ。
そんな彼が、アレクシアとともに生きることを選んでくれた。
そのときから、何があろうと守ると決めた。スウィングラー辺境伯家の後継者として努力してきたすべてを否定され、捨てられた彼女にとって、ウィルフレッドだけが生きる理由だ。
（スウィングラーにいた頃は、ウィルの誕生日といっても、わたしの生活費からいくらか抜いて、祝い金に上乗せするくらいしかできなかったからな。平民階級の子どもらしい誕生祝いを、ウィルが楽しんでくれるかは少々賭けになってしまうが……。まあ、何事も経験だ）
そんなことを考えながら訪れた、『幻想の世界』。
セントラル駅から直通の魔導列車に乗ったときから、アレクシアは想像をはるかに超える人の多さに驚いていた。
そして、はじめて巨大遊興施設の正門を目にした瞬間、彼女は困惑に首を傾げる。

「なんというか……。華やかすぎる外観に目を瞑(つむ)れば、要塞(ようさい)にでもできそうな立派な建造物だな」
思わず呟(つぶや)くと、隣にいたウィルフレッドが頷く。
「はい。これだけの高さと厚(あつ)みのある壁が、単なる遊興施設(テーマパーク)の外壁として採用されているとは、驚きですね。なんだか、資源の無駄(むだ)のようにすら思えます」
「うむ。もしこの外壁全体に防御魔導(ぼうぎょまどう)フィールドを展開し、相当数の魔導兵士を配備したなら、短期攻略は少々難しそうだ」
そんなことを真顔で話し合っていると、肩を軽く叩かれた。
振り返ると、相変わらずスタイリッシュな男物の服装を身にまとったキャスリーンが、アレクシアの肩に手をのせて笑っている。だが、なんだかその目が笑っていない。
「どうした？　キャスリーン」
「…………ウン。今あたしは、あんたたちが受けた教育の歪(ゆが)みと罪深さというものを、しみじみと感じています」
なんだかよくわからないことを呟き、キャスリーンは深々とため息をついた。
そんな彼女に続いて、半笑いをしたジョッシュが言う。
「とりあえず、入場しようぜ。せっかく来たんだから、できるだけ楽しまなくちゃもったいねーだろ？」
「ああ、そうだな」
かくして、まさに城門のような、特大サイズの正門をくぐって入った『幻想の世界(ファンタジー・ワールド)』。

そこは、とにかく人の多い場所だった。
入り口を抜けると、子ども向けの絵本の挿絵(さしえ)に出てくるような外観の建物が、広大な敷地(しきち)にゆったりとした配置でいくつも並んでいる。どうやら、ここでしか入手できない土産物(みやげ)を売っているらしい。
まだ開園したばかりだというのに、すでに大勢の人がカラフルな品物をいくつも購入している様子が見えた。
アレクシアは、不思議に思ってキャスリーンに問う。
「なあ、キャスリーン。入場してすぐに土産物など買っては、荷物になって邪魔なのではないか？」
彼女の素朴(そぼく)な疑問に、キャスリーンは笑って答える。
「そうだね。数量限定の記念品狙(ねら)いで早めに買いに来た人もいるだろうけど……。あの人たちのほとんどは、園内で装備して楽しむためのグッズを買っているんだよ」
「む？」
怪訝そうなアレクシアを見て、キャスリーンが広場中央の巨大な園内案内図を指さした。
「えっとね、『幻想の世界(ファンタジー・ワールド)』は、今いる場所を含めて四つのエリアでできてるんだ。ホラ、あそこに『幻獣の国(ビーストランド)』、『妖精の国(フェアリーランド)』、『冒険の国(アドベンチャーランド)』って書いてあるでしょ？」
園内案内図には、楕円形(だえんけい)をしている『幻想の世界(ファンタジー・ワールド)』の俯瞰図(ふかんず)が、明るい色調で描かれていた。現在地である正門前広場を含め、大まかに色分けされている。
敷地中央にある壮麗(そうれい)な神殿(しんでん)のような建物を中心として、南が正門前広場、北が『幻獣の国(ビーストランド)』、東

が『妖精の国（フェアリーランド）』、西が『冒険の国（アドベンチャーランド）』。

それぞれのエリアの説明書きをざっと確認したアレクシアは、ふむ、と頷いた。

「なるほど。『幻獣の国（ビーストランド）』では、空想上の巨大生物を模した自律稼働（かどう）型魔導具が、『妖精の国（フェアリーランド）』では同じく空想上の小型生物を模したものが設置されているのか。そして『冒険の国（アドベンチャーランド）』では、さまざまなアトラクションを楽しめるようになっているのだな」

「そうそう。で、幻獣（ビースト）と妖精（フェアリー）のエリアに入るときに、幻獣（げんじゅう）っぽい頭飾（あたまかざ）りをつけたり、妖精（ようせい）の羽を背負ったりして楽しむ人たちがいるんだよね。『冒険の国（アドベンチャーランド）』でアトラクションを楽しむときは、ほかのお客さんの邪魔（じゃま）になっちゃうこともあるから、そういう装備は外しておかなきゃならないんだけど」

キャスリーンの説明を聞いて納得したアレクシアは、ウィルフレッドを見上げた。

「ウィル。おまえも、何か装備してみるか？」

「いえ、アレクシアさま。お気持ちはありがたく頂戴（ちょうだい）しますが、そういったものを装備していると、いざというときに邪魔になってしまいますので」

護衛として至極（しごく）もっともなウィルフレッドの言葉に、アレクシアは頷いた。

「ああ、そうだな。――ジョッシュとキャスリーンは、どうする。何か、装備していくか？」

そう問いかけると、片手をすちゃっと挙げてキャスリーンが即答する。

「はい！　ウィルフレッドの誕生日祝いとして、あたしからアレクシアに妖精の羽をプレゼントしたいです！　そして、今日はそれを背負って過ごしてほしいと思います！」

「……む？」

アレクシアは、首を傾げた。

「ウィルの誕生日を祝ってくれるのは、ありがたいな。だが、なぜそのプレゼントがわたしに妖精の羽？　とやらを贈（おく）ることになるんだ？」

誕生日プレゼントというのは、誕生日を迎えた本人に渡すものであるはずだ。

しかし、キャスリーンは軽く腕組みをすると、ふふんと笑った。

「あたしはこれでも、数え切れないくらい甘酸（あまず）っぱいプレゼントのやり取りを目撃（もくげき）してきた商会の娘（むすめ）だよ？　今日はこれと合わせるために、アレクシアの服装を指定したんだから！　ね、いいでしょ？」

今日のアレクシアが身につけているのは、以前一緒に買い物に行った際にキャスリーンが選んでくれた、パフスリーブの白いワンピースだ。

胸元のリボンと、裾（すそ）のレースが可愛らしい。

今回はそれに加えて、アトラクションに挑戦することを考慮（こうりょ）した紺色（こんいろ）のスパッツに、白い運動靴（うんどうぐつ）という装（よそお）いであった。

ふんわりと可愛らしい印象のワンピースと、動きやすさを重視した運動靴。その組み合わせに最初は戸惑ったけれど、いざ身につけてみると思いのほかバランスよくまとまっていて、アレクシアは驚いたものだ。

また、事前に「アトラクションの座席に座る際、髪を結（ゆ）い上げていると座りにくくなる」とのア

ドバイスをもらっていた。そのため今日は髪を下ろし、サイドを軽くピンで留めるだけにしている。

「なんだか、よくわからんな……」

困ったアレクシアは、ウィルフレッドを見上げた。すると、思いのほか真剣な眼差しとぶつかる。

ますます戸惑った彼女に、ウィルフレッドが言う。

「……アレクシアさま。キャスリーンからの誕生日プレゼント、ぜひ受け取りたいと思うのですが、アレクシアさまはご不満でしょうか？」

「む？　いや、おまえがそれでいいというなら、わたしはまったく構わんぞ」

周囲の様子をざっと見てみた限り、どうやらキャスリーンの言う妖精の羽というのは、洋服の背中に取りつけるメダル型の魔導具のようだ。起動させることで、蜻蛉や蝉のような透き通った光の羽を投影するらしい。

多くの女性客が、大小さまざまなサイズの羽を背負っている様子は、なかなか壮観である。

（ウィルは、ああいった装備品に興味があるのか？　……ふむ。さすがに、女性が装備するタイプのものを、自分で試すのは恥ずかしいかもしれんしな）

ざっと周囲を見回し、アレクシアはひとり納得した。

そして、ジョッシュとキャスリーンを見上げる。

「わたしだけがああいった羽を背負うというのは、なんだか気恥ずかしいな。よかったら、きみたちも何か装備していかないか？」

「別にいいけど……。気恥ずかしいなら、もうちょっとそういう顔をして言わねーか？」

「ほんっと、アレクシアの表情筋って仕事をサボりがちだよねえ」

呆れたように言われてしまったが、アレクシアはスウィングラー辺境伯家で過ごしていた頃は、感情を表に出さないのが当たり前だったのだ。

令嬢モードのときは、意識的に穏やかな笑みを浮かべている。けれど、通常モードでいるときまでいちいち表情を作るのは面倒くさいし、それでなんの問題もなかった。

しかし平民社会において、あまり感情を見せない子どもというのが、異端であるとはすでに学んでいる。これでも、以前よりは少しマシになってきていると思うのだが、どうやら及第点には程遠いらしい。

（今後は、通常モードでも自然に感情表現ができるようにしていくべきなのだろうが……。我が事ながら、なんだかものすごく難しそうだな）

何しろ、故郷にいた頃は、いつ侵略者の排除任務が発生するかわからなかったのだ。

常日頃から、必要以上に気を張って過ごしていたわけではないけれど、だからといってへらへらと緩みきった精神状態でいられたわけでもない。

今のアレクシアは、スウィングラー辺境伯家の当主にして実の祖父――デズモンドの「領地の外れにある別邸に移れ」という命令を無視し、出奔した身だ。そのうえ、彼女の存在自体が辺境伯家にとって不都合なものである以上、いつ暗殺者を向けられてもおかしくない。

ごく普通の平民の子どもとしての振る舞いを身につけたい気持ちはあるのだが、アレクシアは自身があまり器用ではないことを知っている。

そっと息を吐いたアレクシアは、ひとまず今の自分が身につけているスキルで、現状に対処することにした。

意識を切り替え、ふんわりと柔らかな微笑を浮かべてクラスメートたちに言う。

「申し訳ありません、ジョッシュ。キャスリーン。わたくしは、どうにも感情表現が未熟なものですから……。今日は『幻想の世界』を出るまで、こちらで対応させていただきますわね」

はじめて街へ買い物に出たとき、人前では『お忍びで遊びに来ているお嬢さま』のように振る舞ったほうが、悪目立ちしないと学んだ。

よって、今回もその手を使わせてもらおうと思ったのだが――。

「……おお、すげえ。アンタのモード変更、はじめて見たときにはめっちゃビビったのに！　人間、どんな衝撃にも慣れるもんなんだな！」

何やら感動した様子のジョッシュに、苦笑いを浮かべたキャスリーンも続く。

「あたしは、まだちょっと慣れないかなー。でもまあ、お嬢さまモードのアレクシアも可愛いから、全然オッケー大丈夫！」

ぐっと親指を立てた彼女は、それからウィルフレッドに向けてにやりと笑った。

「それじゃあ、ウィルフレッド。さっそく、あんたの誕生日プレゼント買いに行こうか？」

「ああ。ありがたく、受け取らせていただくよ」

そうしてやってきたショップには、大きさも形もさまざまな妖精の羽の見本が並んでいた。動物の耳を模した頭飾りや、不思議な形の帽子なども売っている。

ちらりと確認してみたところ、起動させると羽の幻影が出てくる魔導具の稼働時間は、せいぜい八時間程度。使い捨てのおもちゃであるというのに、先日カフェでいただいた苺のタルトが十個も買えるような値段だ。

アレクシアは、困惑した。

（こんなおもちゃに、タルト十個分の価値があるというのか……？）

正直に言うなら、まったく理解不能だ。ただ、キャスリーンとウィルフレッドがひどく楽しげかつ真剣に選んでいるところを見るに、きっと某かの価値はあるのだろう。

――かつて自分が生きてきた世界の常識は、今の自分が生きている世界の非常識。

その事実を改めて胸に刻み、アレクシアは価値観の多様性に思いを馳せた。

しばらくして、そんな彼女にキャスリーンが購入したアイテムを装備させてくる。

蝉の翅のように透き通っているが、シルエットは蝶のほうが近い。とはいえ蝶の翅というにはかなり細く、上部に大きな翅が二枚、下部に小さな翅が二枚セットでついていた。

重さはほとんど感じないものの、背後に視線を向けると少し眩しくて、周囲の様子を確認しづらくなってしまう。

なぜここを訪れる女性たちは、こんな動きにくくなるばかりの装備品を、わざわざ身につけるのだろうか。実に謎である。

困惑したまま、アレクシアはウィルフレッドを見上げた。

「世の中には、不思議なおもちゃがあるのですね。ウィル」

「……はい。とても、お可愛らしいです」

真顔で応じるウィルフレッドの肩を、キャスリーンがぽんと叩く。

「あたし、いい仕事したでしょ？」

「ああ。心から感謝する」

……なんだかよくわからないけれど、ウィルフレッドが喜んでいるのは、間違いないようだ。

（ウィルにも、おもちゃを喜ぶ可愛らしい側面があったのだな……。これほどウィルの可愛いポイントが上がっているのに、堂々と『可愛い』と言ってやれないなんて残念すぎるぞ。……まあ、これが思春期の少年の難しさというものか）

アレクシアにとって、ウィルフレッドは世界一可愛くて優秀で頼りになる従者である。

しかし、今日で十七歳になった彼は、「可愛い」と評されるのをいやがるようになってしまった。これも成長の証であると喜ぶべきなのだろうけれど、こんなにも可愛いウィルフレッドを素直に「可愛い」と言えないのは、ちょっとさびしい。

そんなことを考えている間に、キャスリーンとジョッシュがそれぞれ、蛙の頭部を模した頭飾りと、狼のような獣の耳がついた頭飾りを購入し、装備している。

困惑したアレクシアは、再び問う。

「ジョッシュの頭飾りが、獣人の伝承から着想を得たものであるというのはわかるのですけれど……。キャスリーンのそれは、いったいどういったものなんですの？」

「え？　ああ、うん。このカエルはねー、おとぎ話で宝物を守っているドラゴンが化けた姿なんだ。

そのドラゴン、おバカな冒険者は、本当の姿になってぷちっと踏み潰しちゃうんだけどね。賢くて勇気がある冒険者には、いろいろと役立つ宝物をくれるから、子どもたちの人気者なんだよ」

なるほど、とアレクシアは頷いた。

「ありがとうございます。今度、図書館でその物語の本を探してみますわね」

「うん。わりとポピュラーなおとぎ話だから、いろんなパターンの絵本があるよ。イラストを見てみるだけでも、結構楽しいんじゃないかな」

王都で暮らす平民の子どもたちが、みな当たり前に知っているおとぎ話だというのなら、学んでおくべきだろう。

アレクシアが幼い頃に読んだ古い伝説をモチーフとした物語では、ドラゴンといえば非常に優れた頭脳と豊かな知識、そして膨大な魔力を有する最強の幻獣であったはずなのだが——。

（む？）

そんなことを考えていたアレクシアは、ふとショップの隅に黒で埋め尽くされた一角があることに気がついた。

何やら少年たちが多く集まっている。陳列されているのは、たった今アレクシアが思い浮かべていたドラゴンを模したぬいぐるみやかぶりもの、そして着ぐるみらしい衣服などなど。

近寄りながら周囲をよく見てみれば、黒に続いて白と赤、青のエリアがあって、似たようなドラゴンモチーフの商品が色違いでずらりと並べられている。

アレクシアは、ドラゴンという幻獣に対して特に思い入れがあるわけではない。

だが、最初に目に入った黒いドラゴンのぬいぐるみ——滑らかな曲線を描く漆黒のボディに金色の角、深い緑色の瞳をしたそれは、なんだかとても可愛らしく見えた。

思わず手に取ってみると、ちょうど猫くらいのサイズですっぽりと腕の中に収まる。

瞳は縦長の瞳孔まで再現されていて、幼い子どもが夜中に見たら泣き出しそうな目つきの悪さだ。

だが、それがいい。

（よし、買おう）

今日はウィルフレッドの誕生日だが、だからといって自分用の記念品を購入してはいけない、という決まりはないはずだ。

もしウィルフレッドが、この店内で何か気に入ったものがあれば、すかさず買い求めてプレゼントするつもりだった。しかし、残念ながら今のところその様子はない。

彼への贈り物については、また別の機会に用意することにしよう。

即決したアレクシアは、ぬいぐるみを抱えてウィルフレッドたちのところへ戻った。

すると、ジョッシュが笑いを噛み殺したような声で問いかけてくる。

「なんだ、アレクシア。それ、気に入ったのか？」

「はい、とても」

ぬいぐるみに一目惚れするのははじめてのことだが、この目つきの悪いドラゴンには妙な親しみが湧くというか——とにかく、無条件に可愛らしいと感じてしまう。

にこにこと応じたアレクシアに、ジョッシュがそうか、と頷く。そして、にやりと笑ってウィル

フレッドを見た。
「なあ、ウィルフレッド。おまえの誕生日プレゼントに、このぬいぐるみをアレクシアに買ってやろうか？」
（なぜ、そうなる）
一瞬、唖然（あぜん）としたアレクシアは、ジョッシュを制止した。
「いやですわ、ジョッシュ。これは、わたくしが気に入って購入しようと思ったものです。ウィルへの誕生日プレゼントでしたら、もっと本人が喜ぶものを買ってあげてくださいな」
至極まっとうな彼女の主張に、ウィルフレッドが真顔で続く。
「ジョッシュ。きみの気持ちはありがたいし、判断も的確だと思う。だが、数時間で使い物にならなくなるおもちゃならともかくね……。今後、アレクシアさまが自室に飾るだろうぬいぐるみをきみが贈るというのは、さすがに複雑な気分になるよ」
「……オウ。なんか、すまん」
やり取りを見ていたキャスリーンが、軽くジョッシュの肩を叩いて笑う。
「まだまだお子さまだねえ、ジョッシュくん？」
「うるっせーわ！」
仲よく騒（さわ）いでいる彼らをほほえましく眺めながら、アレクシアは無事に自分の財布（さいふ）でぬいぐるみを購入した。
（うむ。自分の財布で、自分が欲しいと思ったものを手に入れるというのは、やはりとても気分のいいものだな）
その場で値札（ねふだ）を外してもらったアレクシアは、ほくほくしながら三人と合流した。
（しかし、まだ『幻想の世界（ファンタジー・ワールド）』の入り口をくぐっただけだというのに、ずいぶん時間をくってしまったぞ。この調子では、各エリアをすべて回ることはできないかもしれん）
とはいえ、こういった遊興施設（テーマパーク）は無理をして疲（つか）れるために来るわけではないのだろう。
何より、アレクシアたちは平民の生活についてはド素人（しろうと）。はじめからプロ並みの手際のよさを求めるのは、さすがに身のほど知らずというものだ。
初心者は初心者らしく、何より本日の主役であるウィルフレッドが、それなりに楽しんでくれればいい。
そう気持ちを切り替えたアレクシアだったのだが――。

「……うん。正門を見たときのリアクションで、ちょっと予想はしてた。してたけど……ッ」
それから半日かけて『幻獣の国（ビーストランド）』『妖精の国（フェアリーランド）』、最後に『冒険の国（アドベンチャーランド）』までひととおり足を運んでみたところで、キャスリーンがぐっと拳（こぶし）を握（にぎ）りしめた。
何やらひどく苦悩（くのう）した様子の彼女は、アレクシアとウィルフレッドを順に眺め、深々とため息をつく。
「あんたたちが『幻想の世界（ファンタジー・ワールド）』に来るのは、まだちょっと早かったみたいだね……」
そうだな、と同じように眉間に皺（しわ）を寄せたジョッシュが言う。

「どんなにでっかい幻獣や、ふわふわ飛び回る妖精型の自律稼働型魔導具を見ても、驚いてはしゃぐどころか、それに組みこまれてる魔術式の解析（かいせき）に入るんだもんな……」

「『冒険の国（アドベンチャーランド）』の最新型絶叫系アトラクションに乗った感想が、ふたりとも『ひとつ間違えれば命に関わるような状況で、体を拘束（こうそく）されるのは落ち着かない』だけとかさ……」

ここまで付き合ってくれたクラスメートたちが、揃って肩を落としている。アレクシアは、なんだか申し訳ない気分になった。

だが、はじめて見る魔導具というのは、やはりどんな構造をしているのかが気になってしまう。それに、どんなに刺激的なアトラクションを体験しても、飛行魔術の初期訓練時に覚えた恐怖（きょうふ）にはほど遠い。

アレクシアは、しょんぼりと眉を下げた。

「申し訳ありません、ジョッシュ。キャスリーン。どうやら、わたくしたちが『幻想の世界（ファンタジー・ワールド）』を楽しむためには、もう少しいろいろな勉強が必要だったようですわ」

そんな彼女をウィルフレッドが肯定（こうてい）する。

「そうかもしれませんね。しかし、その事実がわかっただけでも、今日はいい経験ができたと思います」

「ですけど、ウィル。今日はせっかくあなたのお誕生日祝いでここに来たというのに、あまり楽しむことができなかったでしょう？」

アレクシアの判断ミスで、せっかくのウィルフレッドの誕生日が、なんともつまらないものに

なってしまったのだ。情けなさと申し訳なさで、自分がいやになる。

しかし、ウィルフレッドは柔らかくほほえんだ。

「いいえ、アレクシアさま。ここを訪れる多くの方々とは違う楽しみ方だったかもしれませんが、オレは充分満喫（まんきつ）させていただきましたよ」

優しい言葉を聞いて、アレクシアはますますいたたまれなくなった。

（ウィルの誕生日祝いを失敗したうえに、本人にフォローまでさせてしまうとは……）

自己嫌悪（じこけんお）でどんよりと俯（うつむ）いた彼女に、ウィルフレッドが続けて言う。

「本当ですよ、アレクシアさま。あなたが日常生活ではありえない魔導具を装備して、ご自分で選んで購入されたぬいぐるみを抱（かか）えていらっしゃる姿を拝見できただけで、大変有意義な一日だったと断言できます」

アレクシアは、こてんと首を傾げた。

「ウィルも、このぬいぐるみが気に入りましたの？」

「そうですね。ただ、自分が欲しいという意味ではありませんので、そのぬいぐるみはどうぞアレクシアさまがお持ちになっていてください」

ウィルフレッドが欲しいと望むなら、同じタイプのドラゴンのぬいぐるみを全色揃えてプレゼントしようと思ったのだが、手元に置いて愛（め）でたいわけではないようだ。

ふむ、と頷いたアレクシアは、一呼吸置いてウィルフレッドを見た。

「残念ながら、わたくしたちに『幻想の世界（ファンタジー・ワールド）』は早すぎたようです。ウィルの十七歳の誕生日を、

こんな形で終わらせるわけにはいきませんもの。何か、欲しいものはありませんか？　今日中に用意するのは難しいかもしれませんけれど、なんでも好きなものを言ってくださいな」
　これ以上の失敗を避けるためにも、情けないがここは本人の意向を確認してしまうのが間違いないだろう。
　アレクシアの発言に、ウィルフレッドは少し考える素振りを見せた。
「……わかりました。でしたら、近いうちに、王立魔導武器研究開発局へご一緒していただけますか？」
「え？」
　想定外な申し出に、アレクシアは戸惑った。一度ジョッシュに視線を向け、ウィルフレッドが笑って続ける。
「以前、ジョッシュに誘われてあちらの見学へ行った際に、ヒューバートどのから連絡先をいただいておりまして。さすがに、再びトラブルに巻き込まれるということもないでしょうし、改めて見学をさせていただきたいと思っていたのですよ」
　たしかに、はじめて王立魔導武器研究開発局の見学に赴いた際は、実験棟の大規模爆発に巻き込まれたり、自分たちの素性が友人たちに露見したりと慌ただしく、まるで目的を達成することができなかった。
　アレクシア自身、王立魔導武器研究開発局には大変興味がある。叶うのであれば、もう一度訪問してみたい場所だ。

　しかし、彼の研究室への見学訪問は、もともとジョッシュの兄であるヒューバートの招きがあって実現したものだ。
　いくらウィルフレッドがヒューバートの連絡先を知っているのだとしても、再訪問の手配を頼むのであれば、ジョッシュに話を通すのが筋というものだろう。
　そう考えたアレクシアが口を開くより早く、ジョッシュが苦笑交じりの声で言う。
「りょーかーい。そういうことなら、おれのほうから兄貴に話を通しておくわ。向こうの都合がつき次第、また見学に行ってみようぜ。――キャスリーンはどうする？」
「うん！　あたしも行きたい！」
　……ふたりのノリのよさには慣れたつもりだったが、さすがにこれは話が早すぎるのではなかろうか。
　若干困惑しつつ、アレクシアはジョッシュに頭を下げた。
「お手数をおかけしてしまい、申し訳ありません。ジョッシュ」
「いんやー。兄貴のほうからも、改めて見学に来てほしいって連絡が来てたしな。ウィルフレッドが言い出さなくても、こっちから誘うつもりだったんだ」
　ぽりぽりと頬をかくジョッシュを見て、アレクシアはほっと肩の力を抜く。
「そうだったのですか。ありがとうございます。ヒューバートさまにも、どうぞよろしくお伝えくださいませ」
『幻想の世界』は自分たちが楽しむには時期尚早だったが、王立魔導武器研究開発局であれば、

何を見ても興味深くのめり込める自信がある。
アレクシアは、そっと息を吐いた。
（うむ。何事も、無理に背伸びをしてはならんということだな）
今回は残念な結果になってしまったけれど、いつかは平民の子どもたちのように、こういった遊興施設(テーマパーク)を楽しめるようになるかもしれない。
ウィルフレッドの言うとおり、これもひとつの経験であり、学びだ。今日という日が、まったくの無駄になってしまったわけではないだろう。
どれほど不本意な経験でも、それをただの後悔(こうかい)にするか、次へのステップのひとつにするかは、自分自身の気の持ちようだ。
よし、と気合いを入れ直したアレクシアは、今までずっと抱えていた黒いドラゴンのぬいぐるみに目を落とす。
──『妖精の国(フェアリーランド)』で目にした、小型の自律稼働型魔導具のような動きは難しくとも、飛行魔術を応用すれば、このぬいぐるみを一定時間浮かすことができるかもしれない。
（妖精のよさはよくわからなかったが、このぬいぐるみがふよふよ空を飛んでくれたら、ものすごく可愛いような気がするぞ）
あらぬ方向へ思考が飛んでいたアレクシアに、ウィルフレッドが落ち着いた声をかけてくる。
「アレクシアさま。今、あなたが考えていることが、なんだかわかってしまったような気がいたしますが……。それはおそらく、人目につくところで実行してはいけないことです。オレも協力しますので、今はどうかお控(ひか)えくださいませ」
アレクシアはにこりと笑って首を傾げた。
「ウィル。いくらわたくしが世間知らずでも、さすがに今ここで、このぬいぐるみを浮かせてみようとは思わなくてよ？」
「そうでしたか。失礼いたしました」
従者からの信用がなくて、ちょっぴり悲しい。
とはいえ、アレクシアは自分が平民社会の常識に欠けていることを知っている。
スウィングラー辺境伯家から追放されてからというもの、そんな自分をずっとフォローしてくれていたウィルフレッドのためにも、速(すみ)やかに平民社会の一般常識を身につけねばなるまい。
そんな決意を新たにしたアレクシアに、キャスリーンがひどく驚いた様子で問うてくる。
「ぬいぐるみを浮かせるって……え？　あんたたち、そんなこともできるの？」
「そうですね。浮かせるだけでしたら、飛行魔術の応用で充分なのですけれど……。『妖精の国(フェアリーランド)』で見た自律稼働型魔導具のように、周囲の障害物(しょうがいぶつ)を自動で回避(かいひ)させるとなると、さすがにちょっと難しいかもしれませんね」
アレクシアがあっさりと答えると、ジョッシュは半笑いを浮かべた。
「あのなー、アレクシア。一応言っておくけど、シンフィールド学園で卒業までに飛行魔術を使えるようになる生徒は、一学年につき多くても十人程度だ。そう簡単にホイホイできる魔術じゃねえってことは、覚えておいたほうがいいと思うぞ？」

シンフィールド学園の新入生は、年度によって多少ばらつきがあれども、おおむね二百人前後だ。
なるほど、とアレクシアは頷いた。
「飛行魔術は、鍛錬でかなり魔力を消費する魔術ですし……。こればかりは、本人のやる気だけでどうにかなるものではありませんものね」
ひとつの魔術を身につけるためには、継続的な訓練が必要になる。
その魔術を習得したいとどれほど切望したところで、鍛錬の過程に必要なだけの魔力保有量がないのであれば、どう足掻いても不可能だ。
残酷なようだが、魔力保有量の多寡によって身につけられる魔術に差が出るのは、如何ともしがたい現実だった。
飛行魔術は使い物になるまでにやたらと魔力と時間を消費するうえ、一歩間違えば死に直結する魔術である。そのため、さほど習得の優先順位が高くないのが実情だ。
高難度なわりに実用性の低い魔術を覚えている暇があるなら、魔導武器や防御魔導フィールドの訓練をしたほうが、はるかに生存率が上がるからだ。
アレクシアは、ジョッシュとキャスリーンを順に見た。
「その点、おふたりの魔力保有量は、充分飛行魔術を習得できるレベルです。興味があるなら、挑戦してもよいかと思いますが……」
言葉を切り、アレクシアは指先で軽く顎に触れた。
「飛行魔術を発動している間はその制御で精一杯で、魔導武器を扱う余裕も、防御魔導フィールドを展開する余裕もないのが普通です。魔導武器や防御魔導フィールドの鍛錬に費やす時間を削ってまで、飛行魔術を習得すべきなのか、ご自身できちんと考えられたほうがよろしいかと思いますわ」
飛行魔術は、移動時間を大幅に短縮できるし、戦場の様子を上空から確認できるというメリットがある。
だが、空を飛ぶということは、常に墜落死の危険に身を晒すということだ。そんな状態で、並行して魔導武器やほかの魔術を使用するなど、普通ならば想像すらしないだろう。
アレクシアの忠告を聞いて、ジョッシュとキャスリーンは目を丸くした。
そして、へにょりと眉を下げたジョッシュが尋ねてくる。
「えっとさ……アレクシア。飛行魔術で自由に空を飛ぶのって、楽しいモンじゃねえの？」
「……楽しい？」
想定外の問いかけに、アレクシアは首を傾げた。
「楽しいというのは、こうしてみなさんと一緒にお出かけするようなことをいうのでしょう？ 新たな魔術を習得すれば、それなりに達成感はあるかもしれませんけれど……。楽しい、というのとは違うのではないでしょうか」
そのときのアレクシアは、思ったことを素直に口にしただけだ。だが——なぜか、ウィルフレッドは片手で目元を隠して俯き、ジョッシュは天を仰ぎ、キャスリーンは目を潤ませてぷるぷると震え出す。

いったいどうした、と内心で引いていると、何やら感極まった様子のキャスリーンが抱きついてきた。
「あぁぁあもうー！　可愛いなあ！」
「……あの、キャスリーン？　突然、どうなさいましたの？」
困惑するアレクシアに、やたらと真面目な顔をしたジョッシュが言う。
「うん。アレクシアってときどき、こっちの庇護欲の入力スイッチをぶっ壊す勢いで押してくるよな。知ってた」
なんだそれは、とアレクシアは眉根を寄せた。
事実として、彼女の戦闘能力はジョッシュよりもはるかに高い。そして、その事実をジョッシュも正しく認識している。
庇護欲というのは、普通は強者が弱者に対して抱くものであるはずだ。それをジョッシュがアレクシアに対して抱くというのは、話がおかしい。
（むう……。まさかとは思うが、令嬢モードのわたしの振る舞いのせいで、現実とジョッシュの認識との間に齟齬が生じてしまっているのか？）
ジョッシュは、相当に賢い少年である。どこか浮世離れした天才肌の兄とは別の、地に足のついた頭のよさとでも言うべきか。
その彼が、まさかこのようなことを言い出すとは。
「……ジョッシュ。わたくしが申し上げるのもなんですけれど、くれぐれも詐欺には気をつけてくださいませね」
アレクシアのモード変更程度で、現実に対する正しい認識ができなくなってしまうようでは、ジョッシュの将来が心配になる。残念ながらこの世の中には、彼のように善良で素直な人間を食いものにする輩が、掃いて捨てるほどいるのだ。
少なからず不安を覚えたアレクシアに、ウィルフレッドがにこりと笑う。
「大丈夫ですよ、アレクシアさま。あなたはたしかにお強いですが、平民としてはまだ生後半年のようなものでしょう？　彼があなたに対して庇護欲を抱いたとしても、なんら不思議はありません」
ウィルフレッドの説明で、アレクシアは非常に複雑な気分になった。
たしかに、彼の言うとおり彼女の平民キャリアはたった半年。それを「生後半年」と表現されるのは少々不本意だが、なぜか否定できない自分もいる。
（生後半年の赤子と同列に語られるのは、さすがに少々もの申したいところだが……）
いったいなんと返したものかと考え込んだアレクシアに、キャスリーンが明るく声をかける。
「ま、あんまり深く考えなくてもいいんじゃない？　――それからさ、アレクシア。あたしは正直、自由に空を飛べるのって、めちゃくちゃ楽しそうだと思うので！　そのうち、飛行魔術の授業を選択できるようになったら、アドバイスをお願いしてもいい？」
「あ、おれもおれもー！」
無邪気にそんなことを言われ、アレクシアはふと、肩の力が抜けるような心地がした。

（……そうか。魔術というのは、『楽しそう』という理由で学んでもいいものなのだな）
今まで彼女がマスターしてきた魔術はすべて、『必要だから』身につけてきたものだ。そこに個人的な感情が入り込む余地はなく、ただ作業に取り組むように黙々と鍛錬を重ねてきた。
本当に、平民の世界で暮らしていると――否、このふたりのクラスメートと過ごしていると、自分のものの見方が、いかに凝り固まっていたものなのか思い知らされる。
今までの人生で身につけてしまった偏見や思い込みを改めることは、そう簡単ではないだろう。けれど、それを自覚したうえで新たな人生を切り開いていくことは、決して不可能ではないはずだ。
そんなふうに考えられることが、なんだか嬉しい。
アレクシアは、ふわりとほほえんだ。
「もちろんですわ。シンフィールド学園の飛行魔術の授業がどのようなものかは存じませんけれど、上空での飛行を想定した訓練をするのでしたら、かなりの重装備となるはずです。いずれにせよ、相当きつい筋力トレーニングが必須となるでしょう。おふたりとも、挫けずにがんばってくださいね」
アレクシアの励ましを聞いて、ジョッシュとキャスリーンが顔を見合わせる。
少しの間のあと、ジョッシュが片手を挙げて問うてきた。
「えっと……アレクシア？　空を飛ぶのって、そんな重装備がいるモンなのか？」
「当たり前ではありませんか。上空は、低温の風が吹き荒れる世界です。そこを、高速で移動しようというのですもの。体温を奪われないための防寒具と、目を守るためのゴーグル、呼吸を確保するためのマスクは必須ですし……。鍛錬の期間中は、飛行魔術の制御を失ったときのための救命魔導具もいるでしょう？　それらだけでも、かなりの重量になりますわ」
防御系魔術に高い適性があるアレクシアは、飛行魔術と同時に防御魔導フィールドを展開できるため、そういった装備はもはや不要である。
しかし、飛行魔術を学びはじめたばかりの頃は、さすがにそういうわけにはいかなかった。鍛錬のたび、装備品の重さにはかなり辟易したものだ。
彼女の経験に基づく説明を、ウィルフレッドが捕捉する。
「まあ、オレたちが鍛錬していた頃に比べたら、最近の防寒具はずいぶん軽量化が進んでいるらしいけれどね。それでも、防寒具を着込んでの地上訓練は汗だくになるし、特に夏場は暑さで本当に死にそうになる。水分補給だけは忘れないほうがいいと思うよ」
ジョッシュとキャスリーンは、揃って眉を下げた。
「飛行魔術って、覚えるの大変そうだなーとは思ってたけど。なんか想像していた大変さと、種類が違う気がするぞ……」
「でも、そっか……。もこもこの防寒具を、地上に下りたからってすぐに脱げるわけじゃないもんね。ていうか、脱いだら脱いだで、普通に荷物になるのか……」
考え込んだふたりを見たウィルフレッドが、ジョッシュに問う。
「ジョッシュ。ヒューバートどのは、最高峰の軍事技術を生活魔導具に転用することを考えている

のだろう？　きみが頼めば、防寒具の軽量化という研究課題にも喜んで取り組んでくださるんじゃないかな？」

「え？　あー……。うん？」

首を捻ったジョッシュに、キャスリーンが笑って言う。

「ダメもとで、聞くだけ聞いてみたら？　まあ、ヒューバートさんがいい感じの防寒具を開発してくれたとしても、それが実用化されるより先に、あたしたちの授業がはじまっちゃうと思うけどさ」

たしかに、キャスリーンの意見は一理ある。どれほど高性能な新装備ができたとしても、それが実用化されるまでには、年単位の時間がかかるのが普通なのだ。

しかしジョッシュは、真顔になって首を横に振った。

「キャスリーン。うちの兄貴の変態性――じゃない、仕事の速さを甘く見るなよ。アイツは、王立魔導武器研究開発局入局初年度から、アホみたいな数の新素材や新技術を開発しては、次々と実用化させているんだ。もしおれが防寒着のことを頼んだら、絶対に、授業開始までに間に合わせてくるぞ」

「そ……そうなんだ？　それは、特許料がエラいことになっていそうだねえ」

さすが商会の娘だけあって、キャスリーンは目の付けどころが違う。

ジョッシュが重々しく頷いた。

「おう。おまけに兄貴は、身内に対してとことん甘い。以前、親父がうっかり肩こり・腰痛の悩みを愚痴ったときには、アホほど高価な魔導結晶を突っ込んだ、巨大クッション型マッサージ魔導具を自費製作してな。それを、親父の誕生日でもなんでもない日に突然、実家に送りつけてきたんだ」

マッサージ魔導具、とキャスリーンが繰り返す。

「……うん。ヒューバートさんが開発したものなら、めちゃくちゃ効果がありそう」

「おう。親父の肩こりと腰痛も、おふくろの四十肩もすっかりよくなってたぞ。おれにはよくわからんが、その魔導具に埋まっていると気持ちよすぎて、すぐに寝落ちしちまうらしい。……ただし」

ジョッシュが言葉を区切り、どこか遠いところを見た。

「マッサージ魔導具の製造費用は、最新鋭の狙撃銃型魔導武器並みらしいけどな」

「……えっと、それって具体的にどれくらい？」

困惑した様子のキャスリーンに、アレクシアは淡々と告げる。

「そうですわね。おおむね、このぬいぐるみが三千体ぶんほどだと思っていただければよろしいかと思いますわ」

アレクシアが本日購入したぬいぐるみは、素敵なカフェで食べるケーキふたつぶんくらいの値段である。

最新鋭の狙撃銃型魔導武器となれば、一般的な強度の防御魔導フィールドをも撃ち抜ける優れものだ。それくらいはするだろう。

少しの間真顔になったキャスリーンはおもむろに頷き、ジョッシュに言った。
「うん。とりあえず、マッサージ魔導具のお値段としては、ちょっと普通じゃないことがよくわかった」
「おう。そしておれは、兄貴にとってたったひとりの弟だ。よって、おれがうっかり『いい感じの防寒具が欲しいー』なんて言った場合、兄貴はとんでもなく高性能で、とんでもない値段の防寒具を開発する可能性がある――というか、間違いなくする」
重々しく断言したジョッシュに異を唱えられる人間は、この場にいない。
アレクシアは、苦笑して首を傾げた。
「性能はともかく、お値段のほうはそこそこで抑えていただかなくては、学園の教材として使うのは難しそうですわね」
「そうなんだ。いくら兄貴がいい感じの防寒具を作ってよこしたとしても、おれひとりだけそれを着てたらいやすぎるだろ？」
ジョッシュが思いきり顔をしかめた。その背中を、キャスリーンがぽんぽんと叩く。
「そりゃあ、そうだね。けどホラ、シンフィールド学園で採用している教材とか防具とか、かなり高性能なものが揃ってるはずだしさ。わざわざヒューバートさんに開発してもらわなくても、大丈夫だってことにしておこうよ」
ウィルフレッドが、申し訳なさそうな顔でジョッシュに詫びる。
「すまない、ジョッシュ。余計なことを言ったね」

「いやー。うちの兄貴が、普通の人間にはちょっと理解不能な変人だってだけだから気にすんな。おれは正直、兄貴が何を言ってるのか理解できているっぽい王立魔導武器研究開発局の人たちも、かなりの変人集団なんじゃないかと疑っている」
身も蓋もないジョッシュの言いように、アレクシアはくすりと笑った。
「そうですわね。普通の感性を持っていらしたら、施設を半壊させるような爆破実験など、恐ろしくてとてもできませんもの」
はじめて王立魔導武器研究開発局を訪問した際、アレクシアたちは実験棟の屋根が吹き飛んだうえ、その余波で多くの建物が倒壊するという大惨事に遭遇したのである。
そのときのことを思い出していると、ジョッシュがぽりぽりと頬をかく。
「あれなー。兄貴にちらっと聞いたけどさ。あの爆発を起こした研究チームの連中、結局除籍処分にはならなかったんだって」
アレクシアは驚いた。
「まあ、そうなのですか？　王室監査が入ると聞きましたし、かなり厳しい処分が下るのではないかと思っていましたから、少々意外です」
人的被害がなかったことと、物的損害についても、復元魔術で問題なく修復される範囲であったことが功を奏したのだろうか。
もっとも、あのときは大規模な復元魔術が複数同時に展開されていた。おそらくそれによって、とんでもない量の魔導結晶が消費されたに違いない。

つまり、彼の研究チームのメンバーたちには、その損害を上回るだけの利用価値があるということなのだろう。
実力主義を標榜する、王立魔導武器研究開発局らしいことだ。
一同がそんなことを話しながらシンフィールド学園に戻ってきたときには、すっかり日が落ちていた。
そのままの流れで夕食をとり、自室へ引き揚げようと食堂を出たアレクシアは、ウィルフレッドに引き留められた。
「アレクシアさま、少々よろしいですか？」
「ああ。どうかしたか？」
ジョッシュとキャスリーンが、軽く手を振ってそれぞれ自室へ向かっていく。
それを見送ると、ウィルフレッドは焦げ茶色の小箱を差し出してきた。
「あなたへの、誕生日プレゼントです。受け取っていただけますか？」
アレクシアは、目を丸くして首を傾げる。
「どうした、ウィル。わたしの誕生日は来月だぞ？」
「はい。もちろん、存じております。これは、オレがお祝いすることができなかった、十一歳のあなたに贈る誕生日プレゼントです」
にこりと笑ったウィルフレッドは、驚くアレクシアの手にそっと小箱をのせた。

立ち読みサンプルはここまで

——以前、一緒に街を歩いたときに、彼女が気になって見ていたチョコレート工房のロゴが描かれた小箱。
中にはおそらく、四粒ほどのしゃれたチョコレートが入っているのだろう。
「本当は、あなたの一歳の誕生日からお祝いをし直したかったのですが……。さすがに、赤子や幼児向けのプレゼントを、今のあなたにお贈りしてもご迷惑でしょう。オレがあなたと出会ってからの誕生日を祝い直すだけで、我慢することにいたしました」
「……それは、我慢というのか？」
思わず素朴な疑問を零してしまったが、ウィルフレッドは笑うばかりだ。
アレクシアの大好きな、優しい笑顔。
「ありがとう、ウィル。……今までで、一番嬉しいプレゼントだ」
本当に、嬉しい。
声が震えそうになるのをどうにか堪えて、アレクシアは礼を言った。
「はい。こちらこそ、今日はありがとうございました。——それでは、お休みなさいませ。アレクシアさま。どうぞ、よい夢を」
「ああ。おまえもな」
そうして自室に戻ってきたアレクシアは、黒いドラゴンのぬいぐるみと大切な小箱を机に置き、しばし悩む。
（チョコレートというのは、それなりに日持ちがするはずだが……。防御魔導フィールドで保護し